

## 連載：博物館と社会を考える

## 第11回

## 博物館の世界的組織の環境保全と教育への取り組み

林 浩二（千葉県立中央博物館）

## 【これまでの連載】

- 第1回 [科学館は博物館ですか？](#)（2015年5月）
- 第2回 [博物館はいくつありますか？](#)（2015年7月）
- 第3回 [博物館の展示は何かを伝えるのですか？](#)（2015年9月）
- 第4回 [博物館の展示は何かを伝えるのですか？ その2](#)（2016年2月）
- 第5回 [博物館の国際的動向2016](#)（2016年10月）
- 第6回 [科学館・科学博物館の社会的役割宣言](#)（2017年3月）
- 第7回 [世界科学館・科学博物館の日（世界科学館デー）](#)（2017年8月）
- 第8回 [第2回世界科学館サミットと東京プロトコル](#)（2017年12月）
- 第9回 [ツールとしての持続可能な開発目標（SDGs）](#)（2018年3月）
- 第10回 [京都で開催された国際博物館会議ICOM大会](#)（2019年10月）

<連載が間遠になったこととお詫びします>

博物館の世界的組織の環境への取り組みについてわたしは、林 浩二（2008）以来、関心を持ち続けてきました。このところ動きが激しいのは、2015年の国連での持続可能な開発目標（SDGs）の採択と呼応しているように思います。歴史的記述についてはこれまでの連載との重複もあることとお許しください。本稿の一部については、林浩二(2020・2021)でオンライン・ポスター発表しました。

## 1. はじめに

博物館には館種ごとに世界的組織があります。ここでは、博物館全体については国際博物館会議

(International Council of Museums, ICOM)、動物園・水族館については世界動物園水族館協会 (World Association of Zoos and Aquariums, WAZA)、植物園については植物園自然保護世界機構 (Botanic Gardens Conservation International, BGCI) を取りあげます。加えて、世界的会合を定期的に開催し、宣言などの文書を発表している世界科学館サミット (Science Centres World Summit, SCWS) (連載第5回・第6回・第7回・第8回参照) についても言及します。

国連教育科学文化機関 (UNESCO) は、2003年の国連総会において、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」(2005-2014)の主導機関に指名されました。また国連総会が2015年に採択した、2030年までの世界の目標「持続可能な開発目標 (SDGs)」(連載第6回・第9回参照)の進捗のとりまとめもUNESCOが行っています。そのUNESCOはこれまでに2回、1960年と2015年の総会でUNESCO加盟国政府に対して博物館に関する勧告を採択しました(連載第5回参照)ので、あわせて考えていきます。

## 2. 国際博物館会議 ICOM (<https://icom.museum/>)

ICOMはあらゆる館種を含む博物館の国際組織で1946年に設立、141の国と地域に40,000以上の個人会員と団体会員がいます(注1)。3年ごとに大会が行われ、直前は2019年の京都大会(連載第10回参照)、その前は2016年のミラノ大会(連載第5回参照)でした。今年2022年8月にはプラハ大会が参集とオンラインのハイブリッドで開催が予定されています(注2)。

連載第10回で紹介しましたように、2019年の京都大会時の臨時総会で、ICOM規約内の博物館の定義の改定が取りあげられましたが、長時間に渡る激論の上、「採決の延期」を決議して終了しました。京都大会の臨時総会に提出された改定案とその元になった文書では、民族性、人権、ジェンダー、持続可能性等の課題が言及されており、SDGsの目標と強く結びついていることがわかります。松田陽(2020)はICOM京都大会の報告集の中で、ICOMの博物館定義の改定をめぐる議論の経緯をわかりやすく紹介しています。その後の改定のプロセスは公開され、会員は所属の各国の国内委員会やテーマ別の国際委員会を通じて博物館定義に組み込むべき用語などの提案に参加しています。プラハ大会時の臨時総会での採決が期待されていますが、本稿執筆の時点で定義文案は示されていません。

一方、ICOMには倫理綱領 (Code of Ethics for museum) があります(注3)。最新は2004年版で、規約における博物館の定義(2007年)よりも更に時間が経っています。こちらも改定のための委員会が発足しており、プラハ大会での改定が目指されています。ICOMサイトでは自然史博物館の倫理

綱領（2013）や文化財の所有に関する倫理綱領（2011）も公開されており、自然史博物館の倫理綱領には環境配慮・動物福祉、持続可能性などにも若干の言及があります。

連載第10回はICOM京都大会直後の執筆でしたので、博物館の定義の改定について速報しただけで、定時総会で採択された大会決議等については全く触れられませんでした。その後、しっかりした報告書（ICOM京都大会準備室（編）、2020）が刊行されています。決議1で持続可能性とSDGsの実現について、決議5で博物館とコミュニティと持続可能性についてと、持続可能性について重ねて決議が採択されたことから、ICOMが環境・持続可能性に大きく舵を切ろうとしていることは伺えます。また持続可能性に関するワーキンググループを2020-2022の時限で設けました（注4）。さらに持続可能性とコミュニティ開発についてのページ（注5）では、ICOM京都大会でのセッションの成果として、OECDと共に作成した自治体・コミュニティ・博物館向けのガイドが公開されています。ICOM日本委員会の京都大会ページには日本語訳もあります（注6）。

あらゆる館種を含む博物館の国際組織であるICOMの環境への取り組みは、徐々に進んでいる段階というところでしょう。恒久的な文書などへの反映という点では、2022年のプラハ大会で開催される臨時総会で規約の博物館定義と倫理綱領の改定がどうなるか、これからのプロセスに注目していきたいと思います。わたしも一個人会員ですので、権限は限られていますが参加に努めます。

### 3. 世界動物園水族館協会 WAZA (<https://www.waza.org/>)

WAZAは世界中の動物園・水族館の国際組織で、1935年に設立、2022年1月現在の会員数は、世界各地の23の協会会員、281の館園会員、10の関連組織会員、22の企業会員となっています（注7）。

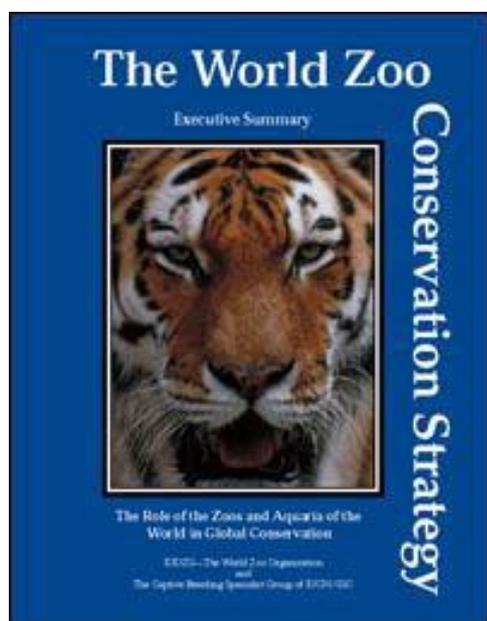
WAZAは環境保全などへの取り組み戦略等のテキストとして発表して協会自身の姿勢をアピールすると共に、直接にはつながっていない館園を含めて世界中の動物園水族館に向けて普及啓発を行っていると見えます。ここでは、出版順に7つの出版物を取りあげます。

#### 3-1. 世界動物園保全戦略 世界の動物園と水族館が地球環境保全に果たす役割（1993）

IUDZG/CBSG (IUCN/SSC), 1993. The World Zoo Conservation Strategy; The Role of the Zoos and Aquaria of the World in Global Conservation.

WAZAの前身であるIUDZG (The World Zoo Organization) と The Captive Breeding Specialist

Group of IUCN/SSCが刊行（76p.）し（注8）、日本語版冊子（B5判、95p.）も1996年に刊行されました。テキスト全体はウェブでは見つかりませんでした。Executive Summary（14p.）は、IUCN（国際自然保護連合）のサイト（注9）で公開されていました。



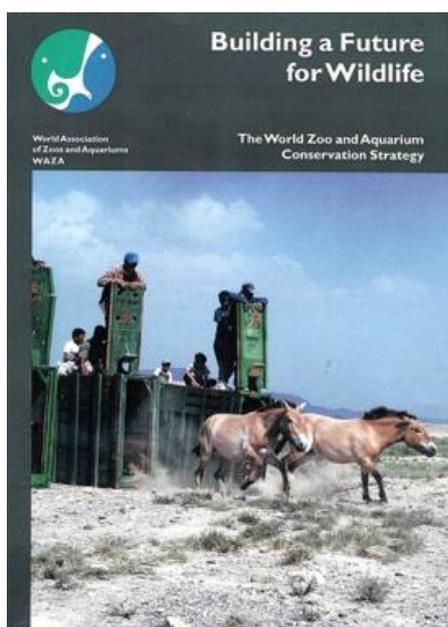
世界動物園保全戦略（1993）表紙（注8）

### 3-2. 野生生物のための未来構築 世界動物園水族館保全戦略（2005）

WAZA 2005. Building a Future for Wildlife – The World Zoo and Aquarium Conservation Strategy.

WAZAは全面改定した戦略（A4判、72p.）を発表し、12か国語で公開しました（注10）。日本語版としては恩賜上野動物園飼育課スタッフによるテキストの仮訳(2005)が関係者で共有されました。

「動物園・水族館・植物園だけが、生息域外での絶滅危惧種の人工飼育・研究・一般市民への教育・専門家への訓練・影響力のあるアドボカシー活動から、本来の生息地での種や個体群の人工飼育のサポートに至るまでの保全活動の全領域で活動することができます。また、動物園・水族館・植物園には来園者という大勢の「なじみのお客様」がいて、その知識・理解・態度・行動・関与のすべてに積極的な影響を与えることができます。（Box.5 p.9）（私訳）」という記述は、これら動植物を生きたまま取り扱っている施設ならではの自負と言えるでしょう。

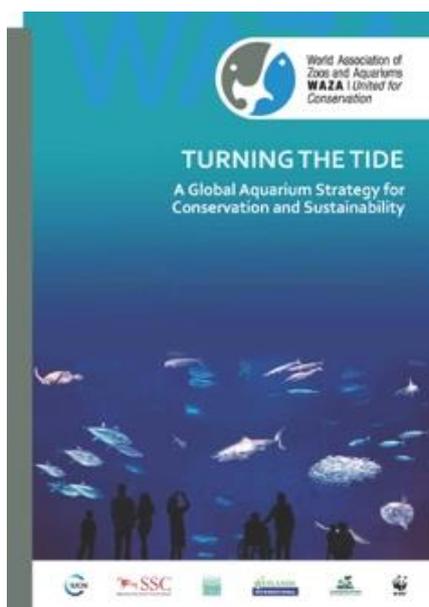


世界動物園水族館保全戦略 (2005) 表紙 (注10)

### 3-3. ターニング・ザ・タイド —保全と持続性のための世界水族館戦略 (2009)

Penning, M. et al. (Eds) 2009. Turning the Tide: A Global Aquarium Strategy for Conservation and Sustainability. World Association of Zoos and Aquariums, Bern, Switzerland.

「世界のすべての地域に急速に水族館が広がっている」(p.1)ことをふまえ、2005年戦略を水族館に特化して出版しました(x+78p.)。日本語を含む6か国語で公開しました(注10)。



ターニング・ザ・タイド (2009) 表紙 (注10)

### 3-4. 保全へのとりくみ 世界動物園水族館 保全戦略 (2015)

Barongi, R., Fisker, F. A., Parker, M. & Gusset, M. (eds) (2015) *Committing to Conservation: The World Zoo and Aquarium Conservation Strategy*. Gland: WAZA Executive Office.

保全戦略を全面改定して刊行(70p.)し、日本語を含む9か国語で公開しました(注10)。

要旨の「このたび、世界動物園水族館協会(WAZA)は、責任表明を更新・刷新し、動物園・水族館コミュニティは、保全によるプラスの成果の創出にっそう努力する必要があるとしました。・・・動物園・水族館は、世界中に膨大な数の観衆を有することから、プラスの変化をもたらす独特の位置づけにあると長くいわれてきました。・・・もっと力強く効果的に行動することができなければ、園館の存続と繁栄を可能にするビジネスモデルや社会的立場がおびやかされることになります。・・・いまこそ、動物園・水族館は、その影響力を最大限に発揮し、野生生物と生息地を救済する取り組みにおいて、真の保全リーダーとなるべきです。」(p.9 私訳)からは、WAZAの使命感・危機感が見て取れます。



世界動物園水族館 保全戦略 (2015) 表紙 (注10)

### 3-5. 野生生物への配慮 世界動物園水族館 動物福祉戦略 (2015)

Mellor, D. J., Hunt, S. & Gusset, M. (eds) (2015) *Caring for Wildlife: The World Zoo and Aquarium Animal Welfare Strategy*. Gland: WAZA Executive Office.

日本語を含む10か国語で公開(88p.)しました(注11)。

WAZA 動物福祉公約ステートメント (p.15) には、

「WAZAの会員である世界をリードする動物園・水族館は、動物福祉に対して継続して責任を負わなければなりません。以下のステートメントは、WAZAの会員の責任の基本について、概略を述べます。

私たちのなすべきことは、

- ・飼育する動物に関して高い福祉基準を達成するように努め、
- ・動物福祉のリーダー、提唱者、および権威あるアドバイザーとなり、さらに
- ・動物の心理的・行動的ニーズを重視した環境を提供することです。 （後略）」

とあり、動物福祉への責任を担う決意が述べられています。



世界動物園水族館 動物福祉戦略 (2015) 表紙 (注11)

### 3-6. 私たちの地球を守る 世界動物園水族館協会 持続可能性戦略 2020-2030 (2020)

WAZA. 2020. Protecting Our Planet, WAZA Sustainability Strategy.

日本語を含む9か国語で公開されました(64p.) (注12)。SDGsの17目標のそれぞれについて、動物園水族館に関連して記述し、さらに「主要な事実と数字」、「推奨する活動」、「ケーススタディ」が掲載されています。

<持続可能な開発目標> 「動物園水族館が真剣にSDGsに取り組むことは、これらの目標の世界レベルでの達成に大きく貢献できる潜在的可能性を秘めています。SDGsは世界をより良くしようという勇気を私たちに与えてくれますし、先進的な動物園水族館が先頭に立ち、考え、行動する上で持続可能性は

不可欠の要素であるはずです。」(p.6)



世界動物園水族館協会 持続可能性戦略 (2020) 表紙 (注12)

### 3-7. 保全のための社会変革 世界動物園水族館 保全教育戦略 (2020)

Thomas, S (2020) Social Change for Conservation: The World Zoo and Aquarium Conservation Education Strategy; Barcelona, WAZA Executive Office.

IZE (国際動物園教育者協会) (注13) とWAZA (世界動物園水族館協会) が連携して作成し、日本語を含む8言語で公開されています (注14)。

要旨 (p.6) から「・・・人々が自然界に対して集団的に考え、感じ、行動する方法を変えるためには、緊急かつ効果的で協力的な行動が必要とされています。このような状況の中で、動物園や水族館は、保全のための社会的変化に貢献するためにリーダーシップを発揮する絶好の機会を提供しています。

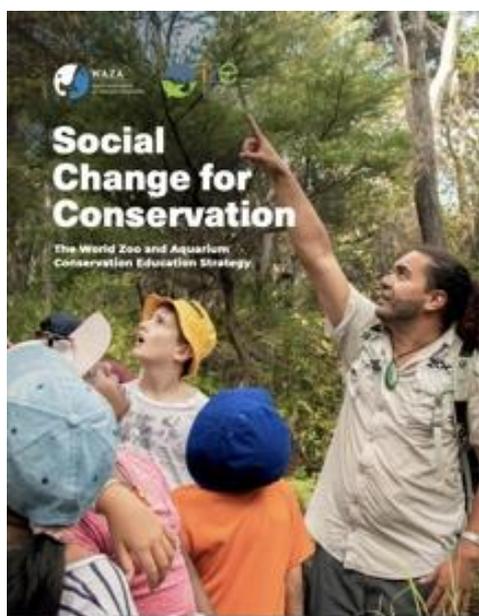
保全のための社会変革は、一連の提言を通じて、動物園水族館の保全のための社会的変化に貢献します。『世界動物園水族館保全教育戦略』は、動物園水族館が園館の使命に不可欠な教育的・社会的成果を達成するための指針となっています。」

「保全教育に関する最初の統一された世界戦略として、『保全のための社会変革』は多くの動物園や水族館にとって並外れた変化を意味します。

IZE (国際動物園教育者協会) とWAZA (世界動物園水族館協会) は、質の高い保全教育における専門

知識、リーダーシップ、力を構築するために、会員、同僚、そしてより広い動物園水族館コミュニティをリードし、支援するというコミットメントを確認しています。」

章立ては1. 保全教育文化の構築、2. 動物園・水族館への多目的な保全教育の組み込み、3. すべての人々のための保全教育の推進、4. 保全教育におけるアプローチと方法の適用、5. 保全教育における動物の管理と福祉の統合、6. 保全教育における保全と持続可能性の優先順位付け、7. 保全教育における訓練と専門能力開発の最適化、8. 動物園・水族館の保全教育価値の証拠の強化です。各章は数項目の「推奨事項」で始まり、そのテーマの記述、ケーススタディ（事例紹介）、測定可能な学習成果、課題などで構成されており、単なるマニュアルではありません。この保全教育戦略をそれぞれの現場でどう活用できるか、ワークショップ等を通じて探っていきたいと思います。



世界動物園水族館 保全教育戦略（2020）表紙（注14）

以上のように、WAZAは環境保全とその教育に関して刊行物を次々と出版してきており、ICOMや他の館種の国際組織の中で群を抜いています。野生の生息地から（しばしば）遠く離れた場所で飼育・展示するという、ある意味で「不自然」な行為を行う存在とも言える動物園水族館が、自らの存在を懸けて社会的意義・意味を一般社会にアピールすると同時に、動物園水族館界内部に向けても自らを律する必要性を訴えているものと見えます。

<以下、次号に続く>

## 文献

ICOM京都大会準備室（編）．2020．第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019報告書．185p．

国際博物館会議（ICOM）・ICOM京都大会2019組織委員会．

ICOM日本委員会サイトで公開：[https://icomjapan.org/report\\_category/icomkyoto2019/](https://icomjapan.org/report_category/icomkyoto2019/)

林 浩二．2006．博物館の国際的組織における環境教育へのとりくみ．Musa 博物館学芸員課程年報（20）：81-85．（追手門学院大学） <リクエストしていただければ誌面スキャンPDFをお送りできます>

林 浩二．2018．「メヘレン宣言」と「東京プロトコル」をどう活かすか ～科学館・科学博物館の社会的役割～．全国科学博物館協議会 第25回研究発表大会 予稿集．p.71-77

全科協サイトで公開：<http://jcs.jp/wp-content/uploads/presentation/25case10.pdf>

林 浩二．2020．国際博物館会議(ICOM)規約の博物館定義の改定案とSDGs．日本環境教育学会 第31回年次大会（オンライン）．ポスター発表（P3）．

林 浩二．2021．博物館、動物園・水族館、植物園の世界的組織の環境保全と教育への取り組み．日本環境教育学会 第32回年次大会（北九州&オンライン）．ポスター発表（P15）．

松田 陽．2020．ICOM博物館定義の再考．博物館研究 55巻別冊（ICOM京都大会2019特集）：

22-26．ICOM日本委員会サイトに載録：<https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/>

本文・注で特記しないウェブサイトの閲覧は2022年1月23日～28日です。

## 注

注1 <https://icom.museum/en/get-involved/become-a-member/>

注2 <https://prague2022.icom.museum/>

注3 <https://icom.museum/en/resources/standards-guidelines/code-of-ethics/>

ICOM日本委員会による日本語訳『ICOM職業倫理規程』は以下からダウンロードできます

[https://icomjapan.org/report\\_category/icomjapan/](https://icomjapan.org/report_category/icomjapan/)

注4 <https://icom.museum/en/committee/working-group-on-sustainability/>

注5 <https://icom.museum/en/our-actions/research-development/sustainability-and-local-development/>

注6 文化と地域発展：最大限の成果を求めて ―地方政府、コミュニティ、ミュージアム向けガイド

[https://icomjapan.org/report\\_category/icomkyoto2019/](https://icomjapan.org/report_category/icomkyoto2019/)

注7 <https://www.waza.org/members/find-a-waza-zoo-or-aquarium/>

注8 <https://portals.iucn.org/library/node/6691>

注9 [https://portals.iucn.org/library/sites/library/files/documents/1993-033\\_Ex\\_Sum.pdf](https://portals.iucn.org/library/sites/library/files/documents/1993-033_Ex_Sum.pdf)

注10 <https://www.waza.org/priorities/conservation/conservation-strategies/>

注11 <https://www.waza.org/priorities/animal-welfare/animal-welfare-strategies/>

注12 <https://www.waza.org/priorities/sustainability/the-waza-sustainability-strategy-2020-2030/>

注13 <https://izea.net/>

動物園水族館教育の世界組織がIZEであるのに対して、国内の組織は日本動物園水族館教育研究会で、「Zoo教研」の愛称でも呼ばれる。ウェブサイト (<https://jzae.jp/>) によると前身の組織は1975年に設立された。

注14 <https://www.waza.org/priorities/community-conservation/the-ize-waza-education-strategy/>

市民科学研究所の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ←ここをクリック（市民研の支払いサイトに繋がります）